

稲作の基礎について IV

J A 福岡市東部 営農生活課

I 高温障害対策について

今年度の検査現場において、米粒の中心に白い部分がある『心白』や腹や背中に白い部分がある『腹白』『背白』を原因とした白未熟粒が見受けられ、1等米比率が低下する原因となりました。

元気つくしは高温に強い品種ですが、ヒノヒカリは高温に強い品種では無いため、注意が必要です。

ヒノヒカリにおける対策

①移植時期を遅らせましょう

出穂後 20 日間の平均気温が 26~27℃を超えると、白未熟粒の発生が増えるため 6 月下旬の田植を行って下さい。

平年の平均気温で見ると、8 月下旬に出穂したヒノヒカリの方が、高温状況下にさらされる可能性が減ります。

②追肥の時期に普段よりも多く施肥しましょう

九州沖縄農業研究センターの研究により、登熟期の高温による品質低下を軽減する試験が行われており、普段よりも窒素の量で 1 反当り 2kg 多くすると品質低下を軽減する事が出来るとの結果が示されています。気象庁の予報等で高温が予想される場合には、稲作だよりでも注意を促しますのでご留意下さいますようお願いいたします。

参考：窒素量 2kg とは ベスト 444 の場合 約 15kg

赤とんぼの里の場合 約 20kg になります

③過度な粗植は避けましょう

過度な粗植は、白未熟粒の発生を助長します。

坪当り 30 株程度になるような粗植は避けましょう。ヒノヒカリの坪当り植付基準は 50 株です。

④水管理を変えましょう

出穂期には水を溜めておく事が基本ではありますが、可能であればかけ流しを行いましょう。

⑤品種を変えましょう

元気つくしは高温耐性品種であるため、ヒノヒカリよりも心白粒や背白・腹白の発生は極めて少ないです。ヒノヒカリと同時期に収穫を迎える高温耐性品種も育成中ではあるようですが、すぐに世に出る事はありませんので、ヒノヒカリから元気つくしへの品種変更を行いましょう。

II 粃枯細菌病について

平成 28 年産ヒノヒカリで発生が目立った粃枯細菌病ですが、出穂後 1 週間程度しないと症状が目につきにくいという困った病気です。

また、粃枯細菌病が発生すると玄米が萎縮したような奇形となり、小米が増えるだけでなく、重症化した部分は粃(しいな)※皮ばかりで実が入っていない状態 となり減収に繋がります。

被害状況

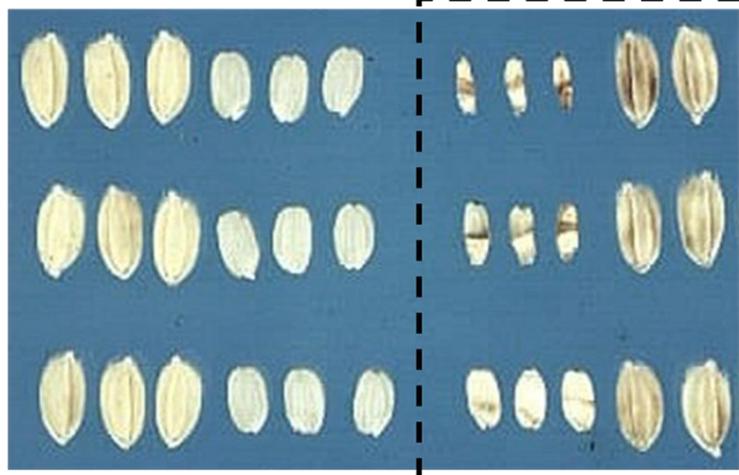


健全籾

同玄米

被害玄米

同籾



前述の通り、症状が見えた後の防除では間に合わない病気ですので、防ぐためには高温が予想される年に関しては予防を行う必要があります。

他の病害虫同様、肥料が多い条件下で発生が助長されますので、先程の高温対策とは矛盾しますが、肥料の与えすぎには注意しましょう。

薬剤を用いた予防方法としては

- ①箱粒剤『ビルダーフェルテラチェス』・『ルーチンエキスパート』は効果があります
- ②出穂3～4週間前にオリゼメート1K粒やオリゼメートパックを用いて予防する
- ③出穂期と穂揃い期の2回、ノンブラス水和剤等を散布する

出穂期の最低気温が24℃以下であり、晴天が続くような年には発生しにくい(症状が現れない)病気ではありますが、発生した場合には小米が増えたり実にならなかつたりと減収に繋がりますので、①～③の対策を検討していただきたいと思います。

Ⅲ収量を構成する要因について

	目標籾数(m ²)	50株植の場合		60株植の場合	
		分けつ18本	分けつ20本	分けつ18本	分けつ20本
夢つくし	28,000～30,000粒	102粒～110粒	92粒～99粒	85粒～92粒	77粒～83粒
元気つくし	28,000～30,000粒	102粒～110粒	92粒～99粒	85粒～92粒	77粒～83粒
ヒノヒカリ	30,000～32,000粒	110粒～117粒	99粒～106粒	92粒～98粒	83粒～88粒

多収を考える場合、品種毎に目標とする籾数があります。それに伴って坪当たり植付株数並びに分けつ株数から逆算し、1つの穂に何粒の籾があれば最大収量になるか表した物が上の表になります。籾が多ければ多い程、収量が上がる訳ではありません。この目標籾数を超えると1粒1粒が小さくなりやすくなりますので、結果小米が増える…といった事になります。

肥料を入れて小米を増やすのは勿体ない事ですので、稲作こよみの施肥量は若干少なめにしています。

稲刈りの際に籾数を数える方は少ないと思いますが、一度数えてみられてはいかがでしょうか？数えられる際には元気が良い部分ではなく、平均的な生育部分の穂を抜いて下さい。